

平成 2 3 年度

全国特別支援学級設置学校長協会
秋季研究協議会
第 2 8 回関東甲信越地区研究協議会

◆研究主題

一人一人の教育的ニーズに応じた特別支援教育の推進

期 日 平成 2 3 年 1 0 月 2 8 日（金）
会 場 千葉県教育会館
主 催 全国特別支援学級設置学校長協会
千葉県特別支援学級設置校校長会

目 次

あいさつ	2
全国特別支援学級設置学校長協会 第28回関東甲信越地区研究協議会千葉大会	会長 河本 眞一 大会会長 田邊 光子
大会実施要項	4
研修1 分科会協議	
第1分科会 提案者 千葉県習志野市立香澄小学校長 佐藤 健	6
第2分科会 提案者 千葉県富里市立根木名小学校長 宮下 忠光	8
第3分科会 提案者 千葉県千葉市立園生小学校長 大曾根 元吉	10
研修2 全体会	12
研修3 講演	14
「ともに育つ ……表現する喜び、それは生きること」 荒川健秀 氏&荒川知子とファミリーアンサンブル	
表紙作品説明	16

あいさつ

全国特別支援学級設置学校長協会
会 長 河 本 眞 一

平成 23 年度・全国特別支援学級設置学校長協会＜秋季研究協議会＞・第 28 回関東甲信越地区研究協議会（千葉県大会）が千葉市で開催されますこと、心よりお慶びを申し上げます。

本大会の準備にあたられました千葉県特別支援学級設置校校長会会長、大会実行委員長・田邊光子校長先生をはじめ、千葉県特別支援学級設置校校長会の皆様方のご尽力に対し心より敬意と感謝の意を表します。

また、本大会の開催にあたり、特段のご配慮をいただきました千葉県教育委員会、千葉市教育委員会、千葉県小学校長会、千葉県中学校長会、財団法人日本教育公務員弘済会千葉支部をはじめとし、多くの関係機関の皆様方に深く感謝を申し上げます。

さて、学校教育法の一部改正が施行され、新たな理念で特別支援教育がスタートして丸 4 年が経過し、今年度は 5 年目に入ったことになります。この 4 年間、障害のある児童生徒一人一人のニーズに応えるオーダーメイドの教育が日々行われてきていると確信しています。

今年度 4 月から小学校では、新学習指導要領が完全実施されています。中学校では、来年度平成 24 年度からの実施ですが、今回の学習指導要領では、その総則の中で「小学校間、幼稚園や保育所、中学校及び特別支援学校などとの間の連携や交流を図るとともに、障害のある幼児児童生徒との交流及び共同学習や高齢者などとの交流の機会を設けること。」と交流及び共同学習に関して明記されました。この考え方こそ、共に生きる、共生社会の実現に向けた大きな一歩に値する表現であると理解しています。ノーマライゼーションの理念の定着のための今後の学校教育に対する期待の大きさを伺い知ることができるものです。

今、インクルーシブ教育システムの実現を目差し、国際法である「障害者の権利に関する条約（仮約）」の批准に向けて、国内では大きな動きの中で議論がされています。文部科学省中央教育審議会特別支援教育の在り方に関する特別委員会では、「合理的配慮等環境整備検討ワーキンググループ」を組織し、障害のある児童生徒等に対する教育を小・中学校で行う場合の「合理的配慮」について検討を始めました。今年中には、特別委員会として合理的配慮等の環境整備について整理を行う予定です。

インクルーシブ教育システムの構築は、一朝一夕にいくものではありませんが、児童生徒の日常的な教育を実践している我々教育現場では、今後ますます特別支援教育に対する校長のリーダーシップの発揮が問われることになってくることは事実です。私たち特別支援学級設置学校長協会の校長は、特別支援学級の担当者（担任）の専門性を更に高め、日々の教育活動がより質の高いものとなるよう校長としてのリーダーシップを発揮し、特別支援教育の推進役として職責を果たすことが重要であると考えます。

結びに当たりまして、今大会の千葉県大会が実り多き研究協議会となり、その成果が自校の課題解決の糸口となるとともに、各都道府県各地域への特別支援教育の発展へと積み上げられることを祈念し、大会のご挨拶といたします。

（平成 23 年 8 月 吉日）

あ い さ つ

平成 23 年度全国特別支援学級設置学校長協会
秋季研究協議会

第 28 回関東甲信越地区研究協議会千葉大会

大会会長 田邊 光子

全国特別支援学級設置学校長協会〈秋季研究協議会〉第 28 回関東甲信越地区研究協議会（千葉大会）の開催にあたり、県内及び全国各地で特別支援教育の充実・発展のためにご尽力されております皆様のご参加を、心より歓迎いたします。また、ご多用の中千葉県教育庁教育振興部長 渡邊 清秋様、千葉市教育委員会教育長 志村 修様をはじめ多くのご来賓の皆様にご臨席を賜りましたこと、誠に有り難うございます。

千葉大会を開催するにあたり、設置校校長の課題に応える大会にするには、どのように内容を充実させていったらよいかを、昨年度立ち上げた実行委員会で話し合いました。そして、研究協議の柱になる三提案についての検討を中心に回を重ねてきました。提案のいずれも、本大会の研究テーマである「一人一人の教育的ニーズに応じた特別支援教育の推進」に基づく、県内各地区での特色ある取り組みを内容としています。

研修 1 の第 1 分科会では習志野市特別支援教育振興大会の取り組みを、第 2 分科会では富里市のライフサポートファイルの活用状況を、第 3 分科会では千葉市の小・中学校から高等学校への支援状況を提案発表します。他地域の方々との密度の濃い協議や情報交流ができ、これからの学校経営を考える一助となりますことを願っています。

研修 2 では、各分科会の報告とそれについての講評をいただきます。また研修 3 では、千葉市内の特別支援学級で学び特別支援学校高等部・専攻科を卒業した荒川知子さんと、そのファミリーによるアンサンブルをお聴きいただきます。音楽一家に育った知子さんのリコーダーの響きをお楽しみ下さい。

千葉県内の特別支援学級数は 5 月 1 日現在 1762 学級、特別支援学級に在籍する児童・生徒数は 7003 名です。昨年度から 55 学級、430 名の増加となりました。年々増加する特別支援学級在籍児童・生徒の、一人一人の特性やニーズに応じた本質的な「生きる力」の育成について、学校全体で取り組んでいる設置校校長の実践があります。一方で、団塊世代の退職期を迎え、校内の特別支援学級担任をどうするか、また、担当者の専門性を高める研修をどう組んでいくか、さらには個別の指導計画・支援計画の内容をどう検討していくか等、差し迫った課題も少なくありません。それらの共通の課題解決に向けて、全国の設置校校長が繋がり、実践交流を続けていくことが肝要であると考えます。本大会に参加された方々に、多くの成果を感じていただけることを願っております。

どのような変化の時代にあっても、私達校長は、全ての子ども達に心豊かな学校生活を送らせ、どの子にも「生きる力」を育てていく学校経営を推進していく責務があります。これからも子ども達のために、かけがえのない職務に邁進していきたいと思っております。

ご支援、ご協力をいただいた関係各位の皆様方に感謝申し上げ、挨拶いたします。

大会実施要項

- 1 研究主題 「一人一人の教育的ニーズに応じた特別支援教育の推進」
- 2 主 催 全国特別支援学級設置学校長協会
千葉県特別支援学級設置校校長会
- 3 後 援 千葉県教育委員会 千葉市教育委員会
千葉県小学校長会 千葉県中学校長会
財団法人 日本教育公務員弘済会千葉支部
- 4 日 時 平成23年10月28日（金） 10:00 ～ 16:00
- 5 会 場 千葉県県教育会館
千葉県千葉市中央区中央4-13-10 TEL 043（227）6141
- 6 大会時程

9:30 10:00 10:30 10:45 12:00 12:15 13:00 13:50 14:10 15:30 16:00

受 付	開 会 行 事	会 場 移 動	研 修 1 分科会協議	会 場 移 動	昼 食 ・ 休 憩	研 修 2 全 体 会 (分科会報告、講評)	休 憩	研 修 3 講 演	閉 会 行 事
--------	------------------	------------------	----------------	------------------	-----------------------	------------------------------	--------	--------------	------------------

◆ 開会行事

- 1 開会のことば
- 2 あいさつ
 - (1) 全国特別支援学級設置学校長協会 会 長 河本 眞一
 - (2) 平成23年度全国特別支援学級設置学校長協会秋季研究協議会
第28回関東甲信越地区研究協議会千葉大会 大会会長 田邊 光子
- 3 来賓祝辞
 - (1) 千葉県教育庁 教育振興部 部 長 渡邊 清秋
 - (2) 千葉市教育委員会 教育長 志村 修
- 4 来賓紹介・祝電披露
- 5 閉会のことば

◆ 研修 1 分科会協議

- ・第 1 分科会「習志野市特別支援教育振興大会の取り組み」
提案者 習志野市立香澄小学校 校長 佐藤 健（本館 303 会議室）
- ・第 2 分科会「地域との連携による富里市特別支援教育の推進」
提案者 富里市立根本名小学校 校長 宮下 忠光（本館 203 会議室）
- ・第 3 分科会「発達障害の児童生徒に対する千葉市の支援体制の現状」
提案者 千葉市立園生小学校 校長 大曾根 元吉（新館 501 会議室）

◆ 研修 2 全体会（各分科会報告、講評）

- ・第 1 分科会助言者
千葉県教育庁 葛南教育事務所 主任指導主事 川口 知子
- ・第 2 分科会助言者
千葉県教育庁 北総教育事務所 指導室長 寺嶋 政長
- ・第 3 分科会助言者
千葉市養護教育センター 所長 沼倉 徹

◆ 研修 3 講演

荒川健秀 氏 & 「荒川知子とファミリーアンサンブル」

◆ 閉会行事

- 1 開会のことば
- 2 あいさつ
 - (1) 全国特別支援学級設置学校長協会 会 長 河本 眞一
 - (2) 平成 23 年度全国特別支援学級設置学校長協会秋季研究協議会
第 28 回関東甲信越地区研究協議会千葉大会 大会会長 田邊 光子
- 3 次回開催地区代表あいさつ
平成 24 年度全国特別支援学級設置学校長協会秋季研究協議会
第 29 回関東甲信越地区研究協議会群馬大会 実行委員長
(群馬県特別支援学校長協会 会長) 澁谷 和郎
- 4 閉会のことば

研修1 第1分科会

「習志野市特別支援教育振興大会」の取り組み ～一人一人の教育的ニーズに応じた特別支援教育の推進～

千葉県習志野市立香澄小学校 校長 佐藤 健

1 千葉県内の特別支援教育振興大会の概要

- * 千葉県内は、18の地区に分かれており、振興大会を実施している地区は13である。
- * 振興大会の実施単位は、いくつかの市町村が合同して実施している例が8か所（61%）、単独市町村で実施が5か所（39%）である。特別支援教育研究連盟と特別支援学級設置校校長会との合同実施が8か所（61%）であり、連盟単独実施が4か所（31%）、校長会単独実施が1か所（8%）である。
- * 実施頻度は、毎年実施が8か所（61%）で隔年実施が5か所（39%）である。
- * 振興大会への参加者は、特別支援学級・学校の児童生徒、同保護者、同教職員に教育委員会関係者での実施が大多数であり、通常学級の児童・生徒、保護者、教職員が加わる例はほとんど無いと言える。
実施内容も特別支援学級・学校児童生徒の劇や歌、踊りの発表という例が殆どであり、これに講演会・作品展がプラスされる例が見られる。
振興大会のねらい（テーマ）は、「ともに」がキーワードとなっている例が多く、生きがい、喜び、励ましなどの言葉がそれに続く。

2 本市の概要

習志野市は、千葉県の北西部・東京湾沿いに位置する人口約158000人、面積約21km²の文教都市である。市内には小学校16校、中学校7校が設置されている。

	知的特別支援学級 (在籍数)	通 級			
		言語	難聴	自閉症・情緒	LD・ADHD等
小学校	7校（78名）	3校	1校	3校	1校
中学校	3校（38名）	1校	0校	2校	0校

このうち特別支援学級の開設状況は、左表のとおりである。

3 実践の概要

本実践報告は、平成22年11月19日に習志野市立秋津小学校を会場として行った「第10回 習志野市特別支援教育振興大会」での取り組み例である。

本大会は、平成4年度より、習志野市内の特別支援学級未設置校を会場（小学校のみ）として隔年で行われ、22年度現在で10回目を数えている。主催は習志野市特別支援教育研究連盟（以下、特連と略す）である。このうち、知的障害特別支援学級設置校10校が中心となり、言語、難聴、自閉症・情緒等の通級設置校がサポートする。

「この指とまれ！ふれあい広場」をテーマに特別支援学級の児童・生徒と通常学級の児童（会場校）が交流し、ふれあい相互理解を深める場として位置づけ、共同学習をも行う場として今日に至っている。本振興大会創設当初から、これからともに生きていく同年代同士の理解・かかわりが最重要との理念から、このような実施形態となっている。交流及び共同学習の内容は、会場校の実態によって違いがある。

4 実践の内容

(1)事前の取り組み

①事前打合せ

- * 特連の実行委員会で実施原案を検討し、その後会場校と実施内容について打ち合わせた。内容の中心は、交流内容と交流学年である。今回は、会場校の3・4年生との交流とした。設置校校長会からは、理事長が出席している。

②事前交流会

- * まず、交流する児童・生徒個々に相互に顔と名前を覚えてもらう必要がある。そのための事

前交流会を設定した。会場校4年生2クラスは、7つのグループに分かれ、小学校特別支援学級7校と1対1（個別）の対応をした。

内容的には、雰囲気作りとしての「レッツゴーいいことあるさ」（手話付き）、ジャンケン列車などをおして相互に交流し、親しみや当日への期待が持てるようにした。

- *会場校3年生2クラスは、中学校特別支援学級3校との交流を行った。歌の披露、アブラハムの踊り、ジャンケン列車などである。ジャンケンの相手は相互に小中学生とし、交流するなかで自然と仲よくなるように配慮した。

(2)当日の取り組み

①開会式

開会式のみ、会場校の児童全員が参加し、歓迎の意を表した。

②ふれあい広場

本振興大会のメインとなる活動である。

- *会場校4年生と小学校特別支援学級7校の児童との交流のメインは、「作って遊ぼう」である。「けん玉、紙ひこうき、かめ、ストローとんぼ」の4種類のおもちゃの中から好きなものを選んで、2人1組で協力し合って共同で作るのである。1対1（個別）の対応で、なおかつ特別支援学級児童がどこまでできるのかを見定めて、どこから手伝う・教えるのか細かい配慮をしていた。担任も横について助言をし、児童同士の絶妙な協力関係の中で共同学習の成果であるおもちゃが完成した。この過程で、親しみや感謝の気持ちが芽生えたと思われる。この活動こそが、本協議会のテーマである「一人一人の教育的ニーズに応じた特別支援教育」を実現していると思われる。また、特別支援教育の振興という設置校校長会の願いにも合致していると感じる。
- *会場校3年生と中学校特別支援学級3校とのふれあい広場は、3年生が「ばか面踊り」を披露した後、中学生と合同で4つのグループに分かれ、長縄100回跳びに挑戦した。小中学生が相互に協力し、共同して取り組まないと勝てない設定なので、真剣に取り組むことができた。2つ目の活動として、小中学生対抗の巨大オセロゲームを行った。

小学校特別支援学級児童の感想～けんだまをつくりました。ていねいにおしえてくれてありがとう。

中学校特別支援学級生徒の感想～*大縄跳びは、小学生と一緒にやれて楽しかった。

*オセロゲームは負けて悔しかった。小学生は強かった。

会場校4年生の感想～私は、〇〇さんと交流、いろんなことができました。〇〇さんは、トンボで遊んで喜んでくれたのでよかったです。一緒にトンボを飛ばして遊んだり、けん玉を教えてあげたりして、だんだん仲よくなりました。最初は、言葉が通じなくて大変だったけれど、だんだん慣れてきて、それが仲よくなれた理由だと思います。（後略）

③交流昼食

主活動のあとが、交流昼食である。それぞれ交流活動をした後なので、和やかな雰囲気の中での交流会食となった。特に車座となつての昼食が良かったようである。

(3)事後の取り組み

事後の取り組みとしては、各校ごとに活動のまとめを行い、感想・手紙などの交換をしている。特連としては、実施報告書（別冊）を作成している。

5 成果と課題

(1)成果

- ①本市の振興大会は、前述したとおり、特別支援学級未設置校と特別支援学級児童・生徒との直接的な交流・共同学習を通じた相互理解を眼目としている。過去の会場校によって内容に多少の相違はあるものの、児童・生徒の感想を見ると、概ねその主旨を実現できていると考えられる。特に児童・生徒同士に活動を通じた心の交流が生まれたことにある。
- ②設置校校長会としても、理事長を通じて振興大会の運営面にに関わり、その改善を図ることができた。

(2)課題

- ①過去には実施していた一般保護者・一般市民への振興大会の周知方法、小中学生間の交流のあり方などが今後の検討課題である。

研修1 第2分科会

地域の連携による富里市の特別支援教育の推進

～ライフサポートファイルの活用を通して～

富里市立根本名小学校 校長 宮下 忠光

はじめに

富里市は人口約5万人、北総台地のほぼ中央に位置し、スイカの産地として知られている。

富里市には、公立幼稚園3園、小学校8校、中学校3校があり、小学校6校、中学校3校に計18の特別支援学級が設置されている。また、県立富里特別支援学校もある。

1 富里市の特別支援教育における取組

富里市は、平成20年度から文部科学省「発達障害等支援・特別支援教育総合推進事業」の「特別支援教育グランドモデル地域」指定を受け、市をあげて特別支援教育を推進している。

(1) 富里市特別支援連携協議会

富里市では、乳幼児期から就労に至るまでの一貫した支援体制の整備をするために、関係機関のネットワークづくり、連携協力の具体的な方策(『ライフサポートファイル』)についての検討を行っている。

関係機関とは、学校、園、教育委員会等の教育機関はもとより社会福祉課、保健センター、簡易マザーズホーム等の行政機関、そして、厚生園等の社会福祉施設、保護者の代表等、富里市の福祉に関わる様々な立場の方々である。この協議会は活動の中心はネットワークづくりや連携を深めている。ここでの話題の中心は『ライフサポートファイル』である。

(2) 特別支援教育専門員による巡回支援(専門チームとしての役割)

小・中学校及び幼稚園における特別支援教育の充実のため、計画的に、あるいは申請に基づき、発達障害等による特別の支援を必要とする幼児・児童・生徒の実態把握及びその教育的支援についての具体的な助言を行うために、市教育委員会が委嘱した専門員を学校(園)に派遣する。

また、専門員会議はケース検討を中心に年3回実施する。

「ライフサポートファイル」とは

ライフステージごとに、障害のある人(児)の障害の状況や支援内容等を記した「支援シート」を作成し、その「支援シート」を1つのファイルにまとめたもののことを指す。

『ライフサポートファイル』を作成する目的は以下の2つである。

- 障害のある人(児)が、生涯を通じて一貫した支援を受けられるようにするため。
- これまでのライフステージの状況が把握しやすくなることから、各機関が迅速かつ適切な支援を行うため。

(3) 特別支援協議会における関係機関とのネットワークづくり

地域自立支援協議会の教育・療育部会（特別支援連携協議会）の内容の充実を図り、支援シートの活用を中心とした各機関の接続・連携を図る。特にライフサポートファイルの具体的運用について実践研究する。

2 富里市立根本名小学校の取り組み

(1) Aさん(現2年生)

H22年4月入学(ファイルを持って入学)

幼児期：保健センターマザーズホームで指導

小学1年生：6月学力不振のため巡回相談

専門員・市指導主事



8月発達相談

担任・保護者・専門員の会議



9月～12月

通級

保護者と実態把握。どこが苦手なのか。

担任・校長・保護者の相談



H23年1月入級

本人・保護者が満足

学習が定着し、友だちとのコ

ミュニケーションができ、成

長の度合いを喜ぶ。

(2) Bさん(現3年生)

H21年4月入学(ファイルを持って入学)

H23年1学期

担任(コーディネイター)が巡回相談
(専門チーム)を依頼



保護者と面談



いろいろな機関との連携が大切

医者・子育て支援課・児童相
談所等

本人の問題だけでなく家庭も合わ
せて



7月・8月

児童ディサービスに通う

〇〇病院に月1回通う。

(精神科)

本校では、23年4月より月1回、特別支援教育委員会を開き、職員に指導・伝達を行っている。

3 成果と課題

ライフサポートファイルを作成している理由は、幼児期は保健センターやマザーズホームで、児童生徒期は学校や発達相談、医療機関で支援を受けてきた内容を入れて積み重ねていくことで対象の子どもは支援を受けやすくなり、学校等の機関は支援をしやすくなるというメリットがある。その結果、担任等に対して具体的な支援方法について指導・助言することができた。

しかし、ライフサポートファイルを作成するだけでは、対象の子どもへの効果的な支援にはつながらない。ライフサポートファイルの中身にかかわった人たち(機関)が巡回相談を核にしてかかわることが重要である。幸い本市には、幼児期には保健センター、マザーズホーム、児童生徒期には、発達相談、専門員巡回支援事業等の様々な支援体制がある。

こうしたことから、巡回相談等のなかで、過去の様子や成長の過程を振り返ったり、現在の様子について確認したりしながら対象の子どもへの今後の支援を考え、さらに、いろいろな機関との連携や充実が大切と考える。

研修１ 第３分科会

「発達障害の児童生徒に対する千葉市小・中・高の支援体制の現状」

千葉県千葉市立園生小学校

校長 大曾根元吉

はじめに

千葉市が実施した「通常学級に在籍する特別な支援を必要とする児童生徒の在籍状況の調査では、LD や ADHD 等の児童生徒は小学校で 1.55%、中学校で 1.19%であることが報告された。また、千葉県が行った県内の高等学校へのアンケート調査では、63%の学校で発達障害の生徒が在籍しているとの回答があった。これらのことから、小学校・中学校・高等学校まで含めた、発達障害のある児童生徒への支援体制の整備は各学校現場において喫緊の課題となっている。

1 千葉市の特別支援教育の状況

(1) 小・中学校特別支援学級等について

小学校 117 校、中学校 57 校のうち、特別支援学級等を設置しているのは小学校が 64 校 (54. 7%) 中学校で 30 校 (52.6%) となっている。LD 等通級指導教室は、小学校 6 校、中学校 1 校に設置している。

(2) 市立特別支援学校について

千葉市立養護学校の高等部は、A、B、C の 3 つの異なる教育課程の編成によるコース制を導入し、ニーズに応じた支援を行っている。

(3) 千葉市養護教育センターの事業から

- ①特別支援教育指導員の配置
- ②学校訪問相談員の派遣
- ③長柄ハッピーキャンプ（宿泊学習）の実施

2 LD 等通級指導教室について

(1) 通級対象児童生徒

(2) 指導内容

①情緒、行動の問題を軽減する。 ②学校生活に適応するために、社会性・対人関係の力を伸ばす。③学習の仕方を習得させ、自信を持たせる。

(3) 週日課（中学校 LD 等通級指導教室の例）

(4) 通常の学級や保護者、相談機関との連携

- | | |
|----------------------|-------------------|
| ①在籍校との連携 | ②保護者との連携 |
| ③養護教育センターとの連携 | ④医療機関との連携。 |
| ⑤LD 等通級指導教室設置校校長会の設置 | ⑥LD 等通級指導教室担当者的会議 |

3 A 中学校の自閉症・情緒障害特別支援学級について

発達障害や軽度の障害があり、かつ集団適応や、対人、行動面等に著しい困難をきたす生徒対象に自閉症・情緒障害特別支援学級として設置された。

- (1) 生徒の在籍状況等
- (2) 週日課等
- (3) 個別の指導計画の作成
- (4) 進路状況

4 高等学校への支援について

- (1) 特別支援学校のセンターとしての役割
市立の特別支援学校2校と、県立千葉特別支援学校が連携し、互いに分担しながら支援を行っている。
- (2) 高等学校への支援の状況
 - ①年度初め高等学校巡回訪問メモ（市立養護学校の例）
 - ②相談概内容（I 高校の例から）
- (3) C地区6校特別支援教育コーディネーター連絡会
特別支援学校に地域のセンター的役割が求められているように、地域の特別支援学級設置校が近隣の小・中・高等学校との連携を通して、特別支援教育のセンター的役割を果たすねらいがある。
 - ①C地区年間活動計画
 - ②C地区各校からの要請による活動（C校のコーディネーターの例から）

5 本校の発達障害児等への支援について

本校は明治7年に開校し137年目を迎える。児童数756名、25学級（特別支援学級2）教職員35名となっている。本年度、生活や学習面で「気になる子」が102名挙げられた。この中で、教育ニーズの高い、特に配慮や支援の必要な児童41名に個別の指導計画を作成し日々の実践を重ねている。

- (1) 支援体制・組織
- (2) 支援の流れ
- (3) 支援の実際
 - ①担任による集団内での個別支援 ②担任外の教員による集団内での個別の支援
 - ③担任外の教員による抜き出し指導 ④管理職による支援
 - ⑤特別支援教育指導員の配置による支援 ⑥特別支援学級との交流
 - ⑦他校・T小学校・LD等通級指導教室での支援

6 今後の課題

本市では、特別支援学級等の設置率の向上、千葉市養護教育センターの事業、LD等通級指導教室（中学校）また、発達障害等があり、不適応状況が顕著な生徒を対象とした自閉症・情緒障害特別支援学級の設置、市立特別支援学校のセンター的機能の活用による高等学校等への支援、特別支援学級設置校による小・中未設置校や高等学校への支援等により、発達障害児等への多様な支援体制の整備に努めてきている。これらの支援体制をさらに充実させていくとともに、各学校の管理職、コーディネーター等を中心に、校内の支援体制も併せて充実させていくことが今後も課題となる。

研修２ 全体会 （各分科会報告、講評）

第１分科会 「習志野市特別支援教育振興大会の取り組み」

・提案者 千葉県習志野市立香澄小学校 校長 佐藤 健

・助言者 千葉県教育庁 葛南教育事務所 主任指導主事 川口 知子

報告メモ

講 評

第２分科会 「地域との連携による富里市特別支援教育の推進」

・提案者 千葉県富里市立根本名小学校 校長 宮下 忠光

・助言者 千葉県教育庁 北総教育事務所 指導室長 寺嶋 政長

報告メモ

講 評

第3分科会 「発達障害の児童生徒に対する千葉市小・中・高の支援体制の現状」

・提案者 千葉県千葉市立園生小学校 校長 大曾根 元吉

・助言者 千葉市養護教育センター 所長 沼倉 徹

報告メモ

講 評



研修3 講演

「ともに育つ …………… 表現する喜び、それは生きること」

荒川 健秀 氏 & 荒川知子とファミリーアンサンブル

1 知子の成長過程

- ・ 障害をもって生まれて……………多彩な活動への挑戦
- ・ 支援学級に学んで……………何にでも挑戦、みんなで挑戦

2 音楽とともに（幼少時）

- ・ 音楽あそび、場があるならどこへでも
- ・ 演奏への入り口……………学級集団での感動
- ・ 本物の音で、本物の視聴を

3 音楽活動の発展

- ・ 家族のアンサンブル
- ・ 「仙台 にとっておきの音楽祭」……………我が家の発表の場の歴史
- ・ 演奏、それは娘の最高の成長の場……………喜びを伝える力

4 表現する喜び

- ・ 様々な表現活動に接して
- ・ 表現を支える力

5 とともに育つ

- ・ 親も子も「ともに新しい体験」
……………「ここまでしかできない」ではなく、「何でもやってみよう」
- ・ 仲間とともに育つ 指導者もともに育つ
- ・ 「表現することは、生きること」 「生きすることは、表現すること」



荒川知子とファミリーアンサンブル

リコーダー：荒川知子

フルート・リコーダー：荒川健秀

ピアノ：荒川幸子

【1】アンサンブル（1）

- | | |
|-------------------------|----------------|
| 1 「ふたたび」 | 久石 譲作曲 |
| 2 「二羽の鳥、飛びながら話してる」 | 林 光作曲 |
| 3 「ミュージカル“アニー”より「トゥモロー」 | チャールズ・シュトルース作曲 |

【2】リコーダーを中心に

- | | |
|--------------------------------|--------|
| 1 「チラータール・ワルツ」 | チロル民謡 |
| 2 「ラルゴ」(ヴァレーノ・リコーダー) <ソロ：荒川知子> | ヘンデル作曲 |
| 3 「タンブーラン」 | ゴセック作曲 |

【3】アンサンブル（2）

- | | |
|--------------------|--------------|
| 1 「ふるさと」 | 岡野貞一作曲 |
| 2 「童 神 warabigami」 | 佐原一哉作曲 |
| 3 「しあわせのたね」 | 荒川 洋作曲 |
| 4 「ソレアード」 | イタリア曲/光田健一編曲 |

「荒川知子とファミリーアンサンブル」

荒川知子は千葉市出身。ダウン症の障害を持って生まれました。千葉市内の特別支援学級で学び、中学校から仙台に転居。いずみ養護学校の高等部・専攻科を卒業。現在、仙台市泉区にある「すていじ仙台」でケーキやクッキーを作って働きながら、「荒川知子とファミリーアンサンブル」として、全国各地で演奏活動を続けています。

父はフルート、母はピアノ教師、兄は新日本フィルハーモニー交響楽団の首席フルート奏者の音楽一家のもとに育ち、特にリコーダーでその才能を発揮し、コンサートでは笑顔ともに美しい響きを皆さんに喜んで頂いています。オリジナルCD「みんなしあわせ」、CD「しあわせのたね」は、全国で好評発売中です。

宮城県共同募金会『赤い羽根親善大使』、熊本県人吉市『しあわせの親善大使』として委嘱を受け、活躍中です。

表紙について

千葉県君津市立小櫃小学校わかば学級5年宮崎和樹さんが、3年生の時に「運動会で一番心に残った場面」というテーマのもと、団体種目「ところがどっこいはいさっさ」の一場面を描いた絵である。この競技は、交流学級の友達と2人でフラフープの輪の中に入り、1周200mのトラックを半周して次のペアに渡すリレーであった。本児は白組で、赤組より先にフラフープを受け取り、リードしたまま次のペアに渡すことができ、「ああよかった。」という安堵感が、ペアの友達とにこにこ笑顔で走っている様子からうかがえる。その後方に、赤組のペアが走り、自分たちが優位に立っているということも表現されている。左上部には、大きな声援を送ってくれている白組応援団の仲間達も描いている。前年度まではスターターの「バン」という音が怖くて耳をふさいでいた子が、初めて楽しい運動会であったと思い起こすことのできる、記念の作品でもある。

＝共に喜び、共に歩もう 明日をめざして＝

千葉県特別支援教育連盟・千葉県特別支援学級設置校校長会では、特別支援教育への一層の理解と協力を願って千葉県下の小・中学校特別支援学級、特別支援学校に学ぶ児童生徒の作品を使って編集したカレンダーを作成している。本作品は「2011 ふれあいカレンダー」に掲載された作品の1つである。